

Title	『うつほ物語』二者一対の法
Author(s)	加藤, 昌嘉
Citation	詞林. 2001, 29, p. 1-14
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/67465">https://doi.org/10.18910/67465</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 『うつほ物語』二者一対の法

加藤 昌嘉

## 一 敷設と更新

「うつほ物語」には、物語を造り進めるに際しての、癖のよ  
うなものがある。

例えば、あて宮求婚者の中にあつて、源仲頼と良岑行正は、  
次の如く、しばしば揃つてその名を挙げられている。

【1】仲頼・行正が手を伝へし物の音なれど、

(俊蔭／ $\alpha$ 七五頁・ $\beta$ 五五頁)

【2】仲頼・行正、今日を心しける琴を調べ合せて、

(俊蔭／ $\alpha$ 八三頁・ $\beta$ 六〇頁)

【3】左・右の大将「正頼・兼雅」、御琴ども合せて、仲頼・

行正、笛吹き、……仲澄の侍従、落躰舞ひて、御階のも  
とに舞ひ出でて、……仲忠、愛で痴れて、……もろとも  
に舞ひ遊び、

(俊蔭／ $\alpha$ 八四頁・ $\beta$ 六一頁)

加えて、その仲頼と行正に並び、【3】の如く、藤原仲忠と  
源仲澄の名が挙げられていることにも目を据えたい。この組

み合せは、「うつほ物語」前半部に幾度も現出するものであつ  
た。以下はその見やすい例である。

【4】かくて、皆、才名のりなどす。主のおとど「正頼」、

「仲頼の朝臣、何の才か侍る」「山伏の才なん侍る」……

また、「行正の朝臣、何の才か侍る」「筆結の才なん侍る」

……「仲忠の朝臣、何の才か」「和歌の才なん侍る。一人

あらずのみや」「仲澄、何の才か侍る」「渡し守の才なん

侍る。あなかま、はや」

(嵯峨の院／ $\alpha$ 二四六頁・ $\beta$ 一八三頁)

【5】ただ今の殿上人の中に、仲頼・行正・仲忠・仲澄にまさ

る人はなし。  
(嵯峨の院／ $\alpha$ 二五六頁・ $\beta$ 一九〇頁)

「うつほ物語」に於いて「仲頼・行正」がしばしば併せて描  
かれることは、夙く片桐洋一氏の指摘するところである。さ  
らに氏は、「途中中断回想形式」によつて紹介されている両  
者が、もともと「原型あて宮物語」に存在しなかつた後補的  
人物であろうことを推定しているのだが、ただ、そうであつ  
たとしても、右の例の如く、その「仲頼・行正」ペアととも

に、多く（仲忠・仲澄）ペアが並んで現れるという事実は、やはり注意される。この四者はいわば一組として、まるで両足の如き一対として布置せられているようだ。

かような人物配置の仕様は、「うつつほ物語」全篇にわたって枚挙に遑がない。今、これを、二者一対の法と呼んでみよう。それは、「うつつほ物語」の叙述の理法、構成の原理とでもいべきものである。そして、「うつつほ物語」という作品は、事あるごとにそうして二組の対称を敷設し、かつそれを更新すること進捗・展開してゆくと見られる。

■A 〈仲忠・仲澄〉と〈仲頼・行正〉

「うつつほ物語」前半部は、〈仲頼・行正〉ペアと〈仲忠・仲澄〉ペアを一対として設え、とりわけ後者に比重を置いて前進する。

【6】仲忠の侍従、内よりまかづるままに、……「仲忠がさぶらふよし、侍従の君」「仲澄」に聞こえ給へ」……御曹司に呼び入れ奉り給ひて、……源侍従「仲澄」、……うつくしく物語などし給ふ。

（嵯峨の院／a二二頁・β一五九頁）

【7】仲忠の侍従は、常にこの殿に来つつ、……源侍従の君「仲澄」をばらからと契りて語らふ。

（嵯峨の院／a二二九頁・β一七二頁）

【8】藤侍従「仲忠」・殿の侍従の君「仲澄」、御曹司に籠

り臥し給ひて、

（嵯峨の院／a二四六頁・β一八三頁）

いずれも「嵯峨の院」巻の一節であるが、見られるように、〈仲忠・仲澄〉は、「藤侍従」「源侍従」として併立し、さらには「はらからと契りて語ら」い合い、ともに「御曹司に籠り臥すなど、殆ど男色のともいえるほど濃密に結び付いてペアをなしている。次の「俊蔭」巻のくだりが、その端緒といえようか。

【9】「仲忠」……いかでかたみに近う語らひ聞こえ侍らん。

……「まこと。官」「東宮」にも、「殊なる親族も

ななめり。君」「仲澄」を深き契りなして、語らひ聞こえよ」となんのたまはせし」「仲澄」「仲澄にも、しか

せられて、「少将」「仲頼」・兵衛佐「行正」、はらからの契りなしたり。君達「仲忠・仲澄」も、さる契りな

せ」となん仰せられし」仲忠、「いとうれしきこと」など、かたみにのたまひて、（俊蔭／a八五頁・β六一頁）

〈仲忠・仲澄〉は、東宮の言に従い、「少将・兵衛佐」と同じく「はらからの契り」を交さんとしている。「少将・兵衛佐」については、註釈書の多くがいう通り、以降の巻々を根拠にして、「仲頼・行正」を指すと同定できる。ただ、室城秀之氏や新編日本古典文学全集は、仲頼や行正が、仲澄など正頼家の子息と、兄弟の契りを結んだ、と解しているようである。しかし、ここは、今まで辿って来た対称の構成原理を鑑み、〈仲頼・行正〉ペアが、「はらからの契り」を交したのに

做つて、《仲忠・仲澄》ペアもそれをなそうとして、と捉えるのがよからう。

ともかく、「うつほ物語」前半部は、あて宮求婚譚を進める際に、多数多様な登場人物の中でも、《仲頼・行正》と《仲忠・仲澄》という類同の対を、一つの基軸に据えていると見られる。のみならず、「うつほ物語」という作品は、こうした相関図に変化・転回をもたらず場合にも、その叙法を利用して物語を進めようとしている。

【10】少将「仲頼」、言ふばかりなく泣き惑ひて、帰りてすなはち法師になりけり。

(あて宮／α二六頁・β三五八頁)

【11】侍従「仲澄」「あて宮からの手紙を」見給ひて、文を小さく押しわぐみて、湯してすき入れて、紅の涙を流して絶え入り給ひぬ。

(あて宮／α二九頁・β三六七頁)

前者は、仲頼があて宮内の報を聞き悲嘆のあまり出家してしまふくんだり、後者は、仲澄があて宮を想いつつ煩悶のすえに絶命するくんだりであるが、仲頼と仲澄が、ともに「あて宮」巻の中で、相前後して物語から後退・脱落していることは注意される。「うつほ物語」は、これまで設えて来た二者一対の理法を律義に守り、均衡を保って、《仲頼・行正》と《仲忠・仲澄》という対称項から、それぞれ一人ずつを撤退せしめているのである。

## ■B 《仲忠・涼》と《仲頼・行正》

以上に見て来た《仲忠・仲澄》ペアと《仲頼・行正》ペアとの対は、しかし、物語の最後まで貫徹されているわけではない。その構成は、或る地点から徐々に形を変えることになる。

「吹上・上」巻に於いて初めて登場する源涼は、例えば次の如く、幾度も、仲忠に「等しき人」として紹介されている。

【12】「松方」……かの「仲涼の」御かたち、身の才などぞ、侍従の君「仲忠」と等しき人になんものし給し」仲頼、「いと興あることかな。かの侍従「仲忠」と等しき人の、またあるよ。……」

(吹上・上／α六三頁・β二四五頁)

仲頼は、容貌・才能ともに仲忠に比肩するという涼の存在を知り、この後、行正を誘い仲忠を誘って、涼のいる紀伊国へ向う。このとき興味深いのは、これまで四人一組・二者一対の中にあつた仲澄が、独り京に留まったままでいることである。

しかして、涼の方は、宮廷社会に賦活するや、すぐに仲忠のペアたる位置に配備せられる。以後、物語には、次のような叙述が頻出することになる。

【13】「嵯峨院」……涼・仲忠、いたづらにさぶらふまじき者なり」……仲頼・行正ら、手惜しまぬ夜なるを、……」

(吹上・下／α二三頁・β二八九頁)

【14】大床子立てて、涼・仲忠、仲頼・行正、大将殿の君達をはじめにて、  
(菊の宴／α二三九頁・β三〇三頁)

【15】仲頼・行正、唱歌つかうまつりて、涼・仲忠、詩誦じなどする声、ただ今の上手、この道の四人、  
(内侍のかみ／α八五頁・β四二九頁)

すなわち、これまで《仲忠・仲澄》と《仲頼・行正》という形で構成されていた対称は、「吹上」巻以後、《仲忠・涼》と《仲頼・行正》という形に更新されたといえよう。このとき指標となるのは、かつて《仲忠・仲澄》が揃って「侍従」であった関係が崩れ、替って《仲忠・涼》が「同じ位」のペアとして併立することである。

【16】すなはち、仲忠に、正四位の位賜ひて、左近中将になされぬ。涼に、同じ位、同じ中将になされぬ。  
(吹上・下／α二六頁・β二九二頁)

【17】左近には、仲忠・涼、二人ながら宰相にて中将なり。  
(内侍のかみ／α三三頁・β三九五頁)

【18】中納言、涼・仲忠、……かかるほどに、藤中納言「||涼||は、忠」は、左衛門督・非違の別当かけ、源中納言「||涼||は、右衛門督かけつ。  
(沖つ白波／α一一頁・β四五〇頁)

右のように、《仲忠・涼》は、同じく「中将」として、続いて同じく「中納言」として、或いは同じく「衛門督」として並び称せられている。かたや、残された仲澄の方は、「侍従」に留まったまま、「あて宮」巻で絶命してしまふ。

涼という人物については、これを「もう一人の仲忠」と捉える見方があり、確かに、琴の名手という類似性、ペアとしての相似性に目を据えた場合には割切な理解といえる。ただ、より俯瞰的に眺め、「俊蔭」「嵯峨の院」巻から流れていた《仲頼・行正》《仲忠・仲澄》という二者一対を顧みた場合には、むしろ、仲澄の占めていた場所を、涼が取って替ったと捉えることができるに違いない。或いは、涼は、新たな仲澄として現出せしめられたと考えるべきかも知れない。

【19】「源中将の朝臣」||涼||、何の才か侍る」「鍛治仕うまつる才なむ」……「藤中将の朝臣」||仲忠||、何の才か侍る」「和歌の才なむ侍る」……「柘澄の朝臣、何の才か侍る」「渡聖の才なん侍る。あな風早のよや」「仲頼の朝臣、何の才か侍る」「樵の才なん侍る。人にあらずのみや」「仲澄の朝臣、何の才か侍る」「山伏の才なむある。あな松臭の香や」「行正の朝臣、何の才か侍る」「筆結の才なむ侍る。……」「かの君」||実忠||は、何の才かおはするや」「藁盗人の才なむ侍る」  
(菊の宴／α一四六頁・β三〇七頁)

右は、「菊の宴」巻に於ける才名乗りのくだりである。これを、先に【4】で見た「嵯峨の院」巻の才名乗りのくだりと比べてみたい。「嵯峨の院」巻と「菊の宴」巻との記事重複現象については、かつて成立過程、本文生成の問題として様々に論じられたが、つまるところは、「菊の宴」巻は「嵯峨の

院」巻の増補修正版であると捉えておくのがよからう。特に、片桐洋一氏が、【4】【19】などにも着目し、改稿の動機として「涼の出現」を重視しているのは首肯される。「菊の宴」巻は、涼が仲澄を抑えて擡頭し出して来る過渡的な一帖であると思しい。

涼が、仲澄に取って替ったのは、二者一対の中の位置だけではない。

【20】「仲忠」「我と君」「涼」とは、いみじく契りたる仲ぞ。かたみに内許さんとぞ言ひける」とて、入り給へば、

(蔵開・下/a一四頁・β五七九頁)

【21】大将「||仲忠」、人よりも疾く、宮「||女一宮」にまかで給へるに、例の入れ奉り給はず。わびて、源中納言「||涼」の方におはして、……ただ入り給ふに、「涼」「げに、いみじう侍り。輝くやうにぞ、しつらひたりける」「仲忠」笑ひ給ひて、「仲忠」「まづ御衣、脱がせ給へ」とて、取りつつ、「涼」に屏風に掛けさせ給へば、「涼」「いとあやしう、「私を」女房になし給はんや」とて、中納言「||涼」、「身に余りたること」「女一宮との結婚」したらん人「||あなた」ぞ、さぞあらん。選り屑の人「||私」は」  
などで、笑ふ笑ふ……

「仲忠」「女一宮の」例の狂ほしさ。……」「涼」「さばれ、いとうれしき夜なり。もろともに明かさん」……二二所、臥し給ひて、中納言「||涼」、「子持ち臭からぬ衾、持

て来」とて、……二所、うち着給ひて、様々にをかしくあやしき御物語し給ひて、

(楼の上・下/a二二頁、β八九六頁)

先の【6】～【9】では、《仲忠・仲澄》が男色的ともいえるほど密に「はらからの契り」を交していた様子を見たが、右の二例は、それに類似する。ともに物語後半部に置かれ、冗談めかした雰囲気の場合であるのだが、《仲忠・涼》は、「いみじく契りたる仲」であり、妻から離れて男二人、相手を女房の如くに扱ひ、戯れ語らい合いながら、「もろともに明かさん」と、同じ衾の中に「臥し」ている。かつての《仲忠・仲澄》ペアは、

【22】宰相「||祐澄」、「男子に侍る祐澄だに、憎くも侍らざりし人也。故侍従「||仲澄」は、これ「||仲忠」を妻のやうにてこそ、これにまかり通ふ所ならず侍りしか。男たちだに、さ侍りし人を、……」

(蔵開・上/a二〇五頁・β五一五頁)

といわれるほど濃密な関係を取り結んでいたが、涼は、こうした仲澄の役割をも引き継いで、仲忠とペアをなしていると考えられる。

以上、「うつほ物語」前半部に於いて、《仲忠・仲澄》と《仲頼・行正》とが対称として布置せられ、さらにそれが、《仲忠・涼》と《仲頼・行正》という形に更新されてゆく様相を

辿り眺めた。もとより、《仲忠・涼》は、「枕草子」や「公任集」の優劣論争を挙げるまでもなく、この物語の最も代表的なペアである。しかし、その組み合わせも、「蔵開」巻以降、「秘琴」と「学問」の力を得た仲忠が官位の上でも次第に突出しはじめると、ペアとしての均衡が崩れ、作品を貫く主軸とはならない。そしてむしろ、そうした変容こそ、いかにも「うつほ物語」らしい仕様だといひ得るだろう。「うつほ物語」という作品は、二者一対の人物相関図を敷設し、各場面・各挿話を造成しながら、それを、絶え間なく更新・改変し続けることで、物語を継起的に発展せしめているのである。

## 二 累増と交叉

ここまでは、二者一対の人物配置がどのようになされているのかを、「うつほ物語」前半部を中心に眺めて来た。以下からは、物語後半部に於いて、この構成がさらに複雑にさらに巧みになされる様相を辿ってゆく。

### ■C 《仲忠・女一宮》と《東宮・あて宮》

「蔵開」巻は、清原家伝来の書物を発見した仲忠が、それを朱雀帝・東宮に奏覧するという次第を語る。それゆえ、そうした内容から、「琴の一族」たる仲忠は「学問」「書物」の力をも得て帝に膚接し榮達の途を進む、というような理解がな

されるのも頷かれることではある。しかし、仲忠から帝・東宮への講書がそれほど意義深い象徴的行為として扱われているかという点、そうとも言い切れない。仲忠は、朱雀帝の願いを受けて毎日のように書を誦し講じなければならず、妻一宮のもとへ帰ることができぬため、次のように、言い訳をしいを訴える文を幾度も送っている。

【23】上「朱雀帝」、「……夜なん「講書を聴くのに」いと興ある。まかでられずやよからん。まだ客人のものし給ふを」とのたまふ。大将「仲忠、いたく嘆きて、宮「女一宮」に御文奉れ給ふ。「今朝は「手紙を頂き」喜びてなん、すなはちと思ひ給へつれど、まかでなんとて侍りつれど、「帝が」許させ給はねば。……」

（蔵開・中／α三三八頁・β五四〇頁）  
そのような心境であるから、仲忠は、文書を進覧し終えるや早々に帰宅し、ようやくに女一宮との共寝を果す。

【24】大将「仲忠」、「……一人は、いと侍りにくし」とて、  
「女一宮を」かき抱き下して、率て奉り給ひて、やがて御帳の中に入り臥し給ひぬ。

（蔵開・中／α二六二頁・β五五七頁）  
一方、仲忠の講書を聴く東宮も、帝の命令ゆえにそこにいるばかりで、心は藤壺あて宮に奪われたまま、想いを縷々述べた文を、次のように幾度も送っている。

【25】上「朱雀帝」、あからさまに入らせ給へるほどに、大

将「仲忠」書直すとてある筆を、東宮、取らせ給ひて、御懐紙にかく書きて、藤壺「あて宮」に奉り給ふ。「今宵は、帝が書聴けとのたまへば、心にもあらでなん。ながらふとも言ふなるものを。」

白雪のふればはかなき世の中をひとり明かさんことこのわびしさ

あらん世の限りだにこそ」とて、

(蔵開・中／ $\alpha$ 二三九頁・ $\beta$ 五四一頁)  
そして、ようやく講書が終ると、東宮は、やはり仲忠と同じように、あて宮の局に赴き、共寝を果す。

【26】東宮、帰り給へり。……宮は、藤壺「あて宮」に入り臥し給ひぬ。  
(蔵開・中／ $\alpha$ 二五四頁・ $\beta$ 五五一頁)

こうした人物布置の仕様にも、二者一対の理法を看て取ることができよう。「蔵開」巻に於いては、帝への文書奏覧が公の重要事項として進められながらも、その反対の私的な位置に、「仲忠・女一宮」ペアと「東宮・あて宮」ペアという相似の男女関係が構成されているのである。

「蔵開」巻以前を顧みると、何段階かの変転はあるにせよ、「仲忠の宰相の中將に女一宮、源氏の中將にさまこそ君、これは宣旨にて賜ふ」(沖つ白波／ $\alpha$ 一〇七頁・ $\beta$ 四四七頁)という形に落ち着くまで、伴侶との関係性に於いては、常に仲忠と涼とが組み合されていた。しかるに、「蔵開」巻に於いては、「仲忠・女一宮」と「東宮・あて宮」という対称が、大き

な比重を以て敷設されるのである。そして以後、「うつほ物語」は、この対を駆動因として様々な人物たちを累積的に付加し、さらに広がりのある世界を展開してゆくことになる。

■D 〈仲忠・女一宮・大宮〉〈涼・さま宮・男子〉と、

〈東宮・あて宮・四宮〉〈東宮・梨壺・三宮〉

「うつほ物語」後半部には、妊娠・出産という事態が、間歇的に幾度も描かれている。「蔵開」巻に於いては、仲忠と涼それぞれに、相次いで初子が誕生する。

【27】かかるほどに、寅の時ばかりに、「大宮」生まれ給ひて、声高に泣き給ふ。中納言「仲忠」も驚きて、御帳の帷をかき上げて、「何ぞや何ぞや」と聞こえ給へば、

(蔵開・上／ $\alpha$ 一四二頁・ $\beta$ 四七三頁)  
【28】源中納言「涼」の北の方「さま宮」、子生み給ふとて、……かかるほどに生み給ひてけり。男と言ふ。

(蔵開・中／ $\alpha$ 二六二頁・ $\beta$ 五五六頁)  
前者は、「蔵開・上」巻、「仲忠・女一宮」に大宮が誕生したくたり、後者は、「蔵開・中」巻、「さま宮」に男子が誕生したくたりである。仲忠については、「しと」で濡れるのも構わず、「御懐放ち奉り給はず」(蔵開・上／ $\alpha$ 一九四頁・ $\beta$ 五〇七頁)、「夜昼、懐放たでなん」(同／ $\alpha$ 二〇〇頁・ $\beta$ 五一頁)というような溺愛ぶりが、随所で語られている。対して、涼の方は、生まれて来た子(蔵開)巻では男子、「樓の上」巻で



は女子)を、次のように毛嫌いしている。

【29】大将「仲忠」、「子はかりかなしきものや<sup>ありける</sup>。君は、思ひ給ふや」涼「いさ、いまだ汚ければ見ず」大将、「言ふかひなきことする君かな。まららが子は、すなはちより懐にこそ入りあたれ」

(蔵開・下/a一〇頁・b五七七頁)

この後でも、涼は、己の子を「恐ろしとて抱き給はず」(同/a二四頁・b五八六頁)というような有り様で、仲忠との違いが甚だしい。蓋し、「うつほ物語」後半部にあつては、仲忠と涼は、もはや相似のペアではなく、明暗ともいうべき対比をなしているといえるだろう。

さて一方、東宮・あて宮及び東宮・梨壺側の出産の次第は、「国譲・上」「国譲・中」巻で、次のように語られている。

【30】仲忠驚きて、「何事ぞ」と問はせ給へば、「宮御方」梨壺の、なやませ給へば」と申す。……「仲忠驚き給ひて、「何ぞ」と問はせ給へば、「使」男と聞こえ給ふ」(国譲・上/a一四三頁・b六六九頁)

【31】かかるほどに、晦日になりて、いと平らかに、男皇子「四宮」生まれ給へり。「あて宮が」気色もなくておはしつるほどに生まれ給へり。

(国譲・中/a一七三頁・b六九二頁)

前者は、東宮・梨壺に三宮が誕生したくんだり、後者は、

東宮・あて宮に四宮が誕生したくんだりであるが、傍線部の如く、梨壺の出産が難産であつたのに対して、あて宮の出産は、平穏な安産であつたという。蓋し、「蔵開」巻に於ける仲忠・女一宮・大宮と涼・さま宮・男子と同じく、「国譲」巻に於いては、東宮・あて宮・四宮と東宮・梨壺・三宮とが明暗ともいうべき対比をなしているといえるだろう。

こうした陰陽の付けぶりを、先にC節で見た対称の流れの中に置くと、次のように把握できるに違いない。すなわち、「うつほ物語」後半部は、仲忠・女一宮と東宮・あて宮という類同の対を敷設しておき、それに漸次、子を添加するばかりでなく、さらには、両者それぞれに、そのネガとなる涼・さま宮と東宮・梨壺を対比的に布置して、仲忠・女一宮と東宮・あて宮という基軸を際立たせているのである。

■E 仲忠・女一宮 < 女二宮 > (弾正宮)と、

東宮・あて宮 < さま宮 > (源祐澄)

しかのみならず、仲忠・女一宮 < ペア > と 東宮・あて宮 < ペア > という対称は、その兄弟姉妹をも含み込んで、さらに膨脹せしめられる。

女一宮の兄弟である三の皇子彈正宮は、「藤原の君」巻に、あて宮の求婚者として登場していたのだが、「蔵開」巻で

は、実はかつて、さま宮の結婚相手として考えられていたことが語られる。

【32】「大宮↓弾正宮」「それ『二さま宮』をこそ、昔は、さ『二弾正宮の妻にと』も聞こえんと思ひしか。思はぬさまなる事の出で来にしかなば」

(蔵開・上／ $\alpha$ 二二五頁・ $\beta$ 五二二頁)

【33】「仲忠↓涼」……この君「二さま宮」も、劣り給はざるは。小さくより、弾正の宮にこそ思はしかしづきたりけるをも、かかる事のありければ、……」

(蔵開・下／ $\alpha$ 八頁・ $\beta$ 五七五頁)

一方、あて宮の兄弟である源祐澄も、「藤原の君」巻初出の人物であるのだが、「蔵開」巻では、それが実は、女一宮を想っていたことが語られる。

【34】この君「二祐澄」一の宮「二女一宮」をいかでと思しける。今は、かの君を、「いかでか」と思せど、聞こえよるべくもあらねば、心一つに思す。

(蔵開・上／ $\alpha$ 二〇七頁・ $\beta$ 五一六頁)

【35】宮はた「二祐澄の子」、「宮」二女一宮の御もとなれば「僕があなたの手紙を持ってゆくよ」と言ふ。大将「二仲忠」、「それをば、など」とのたまふ。「宮はた」にてて君「二祐澄」の「女一宮を」思ひ奉れ給へば、まるも」とて取りて、

(蔵開・中／ $\alpha$ 三三四頁・ $\beta$ 五一六頁)

このように、「蔵開」巻には、弾正宮・祐澄についての新たな

な情報が散見する。しかるに、その弾正宮がひたすらに恋慕するのは、さま宮ではなくその姉「二あて宮」であり、また、その祐澄が積極的な行動を向けるのは、女一宮ではなくその妹「二女二宮」であった。

【36】「弾正宮↓母仁寿殿女御」……おもとこそ、つらくおはすれ。我を幸ひなく生み出で、物「二あて宮を恋う苦しみ」を思はせ給ふ」

(蔵開・上／ $\alpha$ 一七三頁・ $\beta$ 四九四頁)

【37】「仲忠↓女一宮」……恐ろしきものは、弾正の宮こそおはすめれ。物ものたまはず、御妻もなく、年月を経給ふに、何心を思すならん。よし見給へ。これぞ、事は引き出で給はん」

(蔵開・上／ $\alpha$ 一九八頁・ $\beta$ 五一〇頁)

【38】「彈正宮」「かひなの事や。あまり「男を」侮られては、「あて宮は」過ちせられ給はんに。……」女一宮、「あなむくつけ。かくはのたまふ。人「二あて宮」をば、いたづらになさんと思すか。……」女一宮は「いみじく怖ぢ給ふ。

(国譲・中／ $\alpha$ 一九五頁・ $\beta$ 七〇六頁)

【39】女御「二彈正宮の母仁寿殿女御」、「……さ「縁談を」ものする人は侍れど、いかなるにか、「彈正宮は」かく一人のみぞ」と聞こえ給へば、「朱雀帝」「もし、藤壺「二あて宮」をや、月見るやうに思ひけむ。……」

(国譲・下／ $\alpha$ 三七七頁・ $\beta$ 七六五頁)

右の如く、弾正宮は、あて宮だけを一途に想って未だに妻

を娶らず、煩悶のあまり母に向つて己を生んだことを恨みさえし、さらには、あて宮に無体な振る舞いをしかねぬほどの言動を呈して、「事は引き出で給はん」「いたづらになさんと思すか」と人々を恐れさせている。

一方の祐澄も、女二宮に対し、あまりにひたぶるな行動に出ている。

【40】大将「仲忠」、「かの宰相」祐澄「こそ、この宮」女二宮カ」を、あらはれて「公然」と、女御「仁寿殿女御」にも、みづから「仲忠」にも、物せらる「奪取するとおつしやる」なれ「おとど」「兼雅」、「皇子ふさひなりや。あなかしこ。いとおほけなき人ぞや。……」

(蔵開・下／α四七頁・β六〇一頁)  
【41】宰相中将の君「祐澄」の御もとより、二宮「女二宮」の乳母のもとに、……「昨日のつとめて、消息聞こえたりしかど、……昨日のつとめて、追ひまうで来て、「女二宮」のいる「このわたりになん、さる心して侍る。……」とあり。乳母、見て、「あな恐ろし。人もこそ気色見れ」とて、

(国譲・中／α二一九頁・β七三三頁)  
【42】宰相中将「祐澄」、「この大将」仲忠、今日盗人「我々」の気色を見てするにこそあるらめ。宮「彈正宮」たちもおはせで、いとうたばかりつべかりつる物を」とて、齒嚙みをして出でぬ。少将「近澄」も、すべり出でて往ぬ。

(国譲・下／α九九頁・β八〇六頁)

【43】「左近の乳母」仲忠「いと恐ろしき事をこそ、聞き侍りつれ。二の宮」女二宮」の越後の乳母は、宰相中将の君「祐澄」に、「盗ませ奉らん」とたばかりで、多くの物賜りにけるは。……」

(国譲・下／α二二頁・β八一五頁)  
右の如く、祐澄は、弟近澄などとともに、女二宮を付け狙つたり乳母を取り込んだりなどし、女二宮を掠奪する計略をあらわに呈して、「いとおほけなき人」「あな恐ろし」と人々を怯えさせている。

このように、物語後半部にあつては、(女一宮・女二宮)の兄弟である彈正宮と、(あて宮・さま宮)の兄弟である祐澄とが、それぞれ、「恐ろし」といわれるほど相手方の女君に一途な恋情のベクトルを向けて、類同の対をなしているのである。

「うつほ物語」にあつて、「恐ろし」「恐ろしげなり」「恐ろしさ」等も含む」という語は一〇八例存するのだが、後半部では、「蔵開」巻二一六例、「国譲」巻二四七例、「楼の上」巻二一五例というように、とりわけ「国譲」巻にこの語が頻出してゐる。特に、その四七例のうち一一例が、彈正宮・五宮・祐澄・近澄という男たちに用いられているのは、興味深い。「国譲」巻というと、あて宮の皇子が梨壺の皇子かという立太子争いがその中心事項であるかのように考えられがちだが、その一方に、彈正宮・五宮・祐澄・近澄など、狼藉に及びかねぬほ

どひたぶるな恋の徒たちが、精彩を放つて描かれていることにも目を据えておきたい。

そうした情況であるから、弾正宮と祐澄は、それぞれ、己の姉妹である女二宮・あて宮を、男たちの迫り寄りから警護するという働きもする。

【44】大宮、「……かかる折とて、「かつての求婚者たちなどが、あて宮のもとに」走り入り来ば、いかが。……人によからず思ひ言はれ給へれば、名を立てんとて、腹汚き心つかふ人もあらん。……」宰相中将「祐澄」、「……祐澄らよりはじめて、二人づつ、かの御方「あて宮」の宿直仕まつらん。……」

(国譲・上/a二五頁・β六五〇頁)

【45】「仁寿殿女御」「……よしともあしとも、人には「女二宮を」見せぬぞよき。弾正の宮に、いとよく聞こえん。……こと人よりも、宰相の君「祐澄」は、いとわづらはしき。……」と聞こえ給へば、「女一宮」「……弾正の宮に聞こえ給へ。蔵人の少将「近澄」は、……」女二宮に逢わせろと」藤壺ぞ責め聞こゆめりし。いみじく恨むめりしかども、耳にも聞き入れ給はざめりき」

(国譲・上/a二四七頁・β六七二頁)

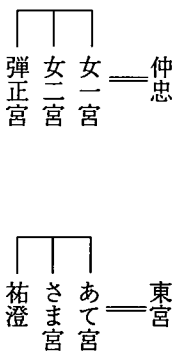
【46】弾正の宮は、……女御の君「母仁寿殿女御」の聞こえおき給へれば、「二宮の御もとに、夜も昼もおはします。蔵人の少将「近澄」、「いかで」などは思せど、男宮「

弾正の宮」おはしまひて、……蔵人の少将、中納言の君とて「女二宮の」御身に付き仕うまつる人に、よろづの宝物を取らせ給ひつつ、「盗人に入れよ」とのたまへど、さるべき折もなし。……異人もあまた聞こゆる中に、五の宮より切に聞こえ給ふ。

(国譲・中/a二〇五頁・β七二三頁)

一例目は、東宮のものとなつてもなお迫り寄られかねないあて宮を、祐澄たちが守衛しようというくだり。後一例は、祐澄・近澄・五宮たちに掠奪されかねない女二宮を、弾正宮が守衛しようというくだり。祐澄と弾正宮は、相手方の女君に強い恋慕のベクトルを向けるという点のみならず、己方の姉妹を擁護するという役割に於いても一対をなしている。こうした相関関係は、次の系図によつて、より見やすいものとなるだろう。

【人物系図】



上段・下段は、実にきれいな対称をなしている。「うつほ物語」後半部は、(仲忠・女一宮)と(東宮・あて宮)という対を形成するばかりでなく、そこに漸次、(女二宮)へ(さま宮)

や、〈弾正宮〉〈祐澄〉という兄弟姉妹を累増し、さらには、〈弾正宮〉から〈あて宮・さま宮〉へ、〈祐澄〉から〈女一宮・女二宮〉へという志向を設けて、この対称の間で恋情のベクトルを交叉せしめているのである。あまりに律義な、というべきかも知れないが、「うつつほ物語」後半部は、対という構成を基本にしなが、それを膨脹させ連関させることで、より豊かで厚みのある人物相関図を造り得たといえよう。

ただ、C→E節で辿り見たところから、「仲忠と王権」とか「仲忠」族の栄華」とかいった把捉をすることは忌避しておきたい。仲忠は次の帝に比肩しているわけではなからう。むしろ、「うつつほ物語」後半部は、物語前半部で精彩を放つていた仲忠とあて宮を利用して、〈仲忠・女一宮〉と〈東宮・あて宮〉とを楕円の二つの焦点のように置き、これを力源として物語を發展せしめている、と理解するのがよい。

以上、「うつつほ物語」に於ける二者一対の構成法に着目し、それが敷設・更新される様相、それが累増・対比・交叉される様相を考察して来た。

こうした叙法を、物語作者の周到な意図であると唱えるつもりはない。もとより、現存する「うつつほ物語」全篇が一人の書き手によって統御されているとは到底思われぬ。だが、それでもなお、そこに、「竹取物語」とも「落窪物語」とも「源氏物語」とも異なる、「うつつほ物語」なりの物語造成術

が潜勢し或いは発揚しているのであれば、今日残るテキストからそれを掬い上げることも必要だろう。

また、こうした叙法を、「うつつほ物語」全篇を貫く主法則のように説くつもりもない。この物語の構成原理<sup>(9)</sup>としては、他にも、例えば、多種多様な事物や名称を列挙して各場面を構築する網羅類聚の法、登場人物を三角形に布置してその均衡と拮抗を語る三幅対の法、既に存在する巻々の記事を改め訂しながら新たな事態を招来せんとする事実変更の法……等々を指摘することができるに違いない。そして、それらが、物語なるものを書き留め推し進めるための一つの拠り所になっているとすれば、そこから、未だ定型のない物語が如何に生成し長篇化を果していったのかを辿ることも可能だろう。

#### 【註】

- (1) 片桐洋一「宇津保物語の方法―その一、執筆態度と執筆過程 (二)―」(『女子大文学 国文篇』第二二号・一九六一年一月)
  - 同「うつつほ物語第一の表現と構造―主として待遇表現を中心に―」(『宇津保物語論集』古典文庫・一九七三年)
  - (2) 室城秀之「うつつほ物語」の親族関係表現について―「親方」「親子」「子にす」「親子の契り」「はらからの契り」―(『講座平安文学論究 第二二輯』風間書房・一九九七年)
- 『新編日本古典文学全集 うつつほ物語』、二二〇頁頭註
- なお、両者はともに、「藤原の君」巻で、行正と顕澄とが「うるはしく語らひきこえてある」(α二八頁/β九三頁)と語られるこ

とを踏まえ、行正らと、正頼の子息たち（仲澄・顕澄）との結び付きを考えているようである。だが、この物語に於ける巻々の吻合強度（成立という淵源の問題をも含めた、記述の上での巻々の連繋性）を鑑みても、「俊蔭」巻と「嵯峨の院」巻の膺接ぶりをこそ重視したいと思う。後考を俟ちたい。

(3) 三田村雅子「宇津保物語の「琴」と「王権」——繰り返しの方法をめぐって——」（『東横国文学』第一五号・一九八三年三月）

大井田晴彦「吹上の源氏——涼の登場をめぐって——」（『中古文学』第五八号・一九九六年一月）

(4) 片桐洋一「宇津保物語の構成——俊蔭の巻と嵯峨院、菊の宴両巻をめぐって——」（『国語国文』一九五四年六月）

野口元大「嵯峨院」の成立」（『古代物語の構造』有精堂・一九六九年）

同「うつほ物語の原初構想とその変容」（『うつほ物語の研究』笠間書院・一九七六年）

(5) 「蔵開」巻の位置づけ、及び、「学問」「書物」の意義については、以下の論稿を参照。

桑原博史「宇津保物語の構成——蔵開き・国譲り両巻をめぐって——」（『言語と文芸』第四四号・一九六六年一月）

齋藤正志「藤原仲忠の人物造型——〈秘琴〉〈漢学〉〈官職〉〈御帯〉——」（『二松』第三集・一九八九年三月）

伊井春樹「俊蔭の家集と日記類——「うつほ物語」蔵開巻の意義——」（稲賀敬二ほか編『中古文学の形成と展開 王朝文学前後』和泉書院・一九九五年）

室城秀之「うつほ物語の後半の始発における〈蔵開き〉の意味」（『うつほ物語の表現と論理』若草書房・一九九六年）

大井田晴彦「俊蔭一族復興——「蔵開」における〈書物の力〉——」（『新物語研究』五 書物と語り）若草書房・一九九八年）

(6) 仲忠に抱かれる大宮、及び、「抱くこと」については、次の論稿を参照。

立石和弘「抱かれる子——「うつほ物語」大宮と仲忠の造形をめぐって——」（『野州国文学』第五九号・一九九七年三月）

(7) 原田芳起「彈正の宮の恋——物語構想の進展——」（『宇津保物語研究 考説編』風間書房・一九七七年）

右は、彈正宮という人物に視点を据えた、数少ないそして優れた論稿である。ただ、その恋情を「精神的な純粋な愛」と捉えている点には、少しく修正を加えたい。

(8) 祐澄・近澄についての検覈は、これまで殆どなされていないようである。以下の論稿に些かの考察がある程度だろうか。

野口元大「蔵開」と「国譲」の世界——（『うつほ物語の研究』笠間書院・一九七六年）

中野幸一「宇津保物語第二部——（三谷栄一編『体系物語文学史』第三巻 物語文学の系譜Ⅰ 平安物語）有精堂・一九八三年）

(9) 物語を構成する叙述の原理という、滝沢馬琴の「稗史七法則」（『南総里見八犬伝』第九輯中帙附言）が想起される。とりわけ馬琴が「対」の概念を重んじていたことは、以下の論稿で詳説されている、示唆に富む。

徳田武「八犬伝」の小説原理——「隠微」三論——」（『日本近世小説と中国小説』青裳堂書店・一九八七年）

亀井秀雄「主人公と構造」（『小説』論——『小説神髄』と近代——）岩波書店・一九九九年）

また、馬琴の「小説原理」を受容した、萩原広道「源氏物語評釈」

も参考になる。その概要については、以下の論稿を参照。

得丸智子「萩原広道の源氏物語論―宣長と馬琴の接点として―」

〔国語国文〕一九八七年一月

パトリック・カドー「萩原広道の文章法則論とその『源氏物語』への適用、付法則の索引」〔詞林〕第二一〇号・一九九七年四月

※「うつほ物語」の本文は、尊経閣文庫蔵前田家十三行本を底本とする、以下の校註書に拠った。

α▼野口元大「校註古典叢書 うつほ物語1〜5」(明治書院・一九六九〜一九九九年)

β▼室城秀之「うつほ物語全」(おうふう・一九九五年)

▼室城秀之ほか「うつほ物語の総合研究1 本文篇 上下」(勉誠出版・一九九九年)

▼中野幸一「新編日本古典文学全集 うつほ物語1」(小学館・一九九九年/2・3未刊)

引用に際しては、右四書を参考にしつつ、私意により、適宜、漢字を宛て、句読点・濁点・鉤括弧を付け、踊り字を復し、本文を改訂する等の処置を施してある。なお、……は中略した箇所、「」内は私に補った語句である。また、( )内は、底本の巻名と、右のα本・β本に於ける該当頁数を付記した。

(かとう・まさよし 本学大学院助手)